

優秀賞（国土交通事務次官賞） 作文（中学生）の部

『立ち上がる日本』

埼玉県杉戸町立杉戸中学校 三年 野口 瞳

「今から向かうから。大丈夫だ。今、助けにいくから。」

深夜父の携帯電話が鳴り今まで見たこともない父の横顔から何か大変な事が起きたに違いないと察した。父の古くからの友人からの電話だった。数日間続いた記録的豪雨で友人宅の近隣を流れる河川が増水、溢れ土砂災害に見舞われたと言う。ニュースを見て心配していた父。友人が暮らす地域だったので父は何度も友人に連絡を入れていたが通じなかった。そんな矢先、友人からの電話が、避難所暮らして連絡がとれなかったと。家族全員、無事だったが家の中に土砂が床上一mまで流れ込み、その土砂をかき出し家族総出で片付けているというのだ。

ニュースで何度も見た光景だが友人がまさに今その地獄絵の中でもがき苦しんでいるかと思うと、いても立っても居られない父。実は昨年襲った東日本大震災のとき一番最初に父の安否を気遣い連絡をくれたのがその友人だった。しかも父の実家の瓦が震災で崩れ落ちなかなか瓦が入手でできずブルーシートで応急処置をしている事を知った友人は、瓦を手配しトラックを借り自ら届けてくれた。そんな事があつた父と友人だからこそ父は深夜友人からの電話を受けすぐさま駆けつけたのだ。五日間、父は会社を欠勤し泊まり込み無事帰宅。父の表情はとて重々しかった。そして出迎えた姉と私を思い切り抱き締めた。「お前達の無事がこんなにも有難いなんて。」と。現地で様々な体験・光景を目にした父。どんなに恐怖・不安でいたことが察する事ができた。その晩、父が私に語った。

「友人の涙を初めて見た。土砂をすくうシャベルの手が突然止まり、友人が立ちすくんでいた。友人の視線の先には家族写真の額縁が。家を建てたとき庭先で撮影した写真だった。肩を震わせ土砂で汚れた額縁を何度も何度も拭きながら泣いていた。俺はただ友人のそばに居てやることしかできなかった。」と。土砂は容赦なく家族の思い出を飲み込み流れ去って行く。冷たくよんだ爪跡だけを残して。

日本は地形・気候上、毎年のように土砂災害が起きている。しかし母なる大地からのこの猛威から何度も立ち上がっている。それこそが私達日本人の誇りであると思う。

そして人は誰もが誰かに支えられ一人では決して生きてはいけなさと知った瞬間だった。土砂災害の被災地で頑張っている人々がいるからと私たち家族全員、背筋がシャンとしたように感じた。

日本は本当に美しい国土である。自然は豊かで北から南まで亜寒帯から亜熱帯まで多様にあり、美しい四季の移り変わりもある。

しかし、他国にはない厳しい条件も同時にもっているのだ。素晴らしいと眺めているだけで、手を抜いてしまえば一気に荒れ果てる宿命をも、もっているのである。

少しでも住みやすくしようと自然に手を入れてきた環境は、祖先から受け継がれた私たちも改善し、そして子孫に渡さなくはならないのだと思う。

土砂災害の防止対策が日本各地で進められているが、対策の完了に近づいたら次の新しい土砂災害防止対策の目標をもつことが大切だと思う。人間は常に“しなくてはならないこと”をもっていないと、途中で止まってしまうと思うからである。

対策の完了という頂上へ通じる、あらゆる近道を決して探してはいけないのだ。すべてとはいわないが、人の命を守る世界で近道をしようとする不誠実で倫理に反することが忍び込みやすいように思えるからだ。

土砂災害防止対策が予定通りに進まず、いら立つこともあるだろう。しかし落ち込むこと自体が悪くはないと思う。無理してマイナス思考になろうとするより、一度立ち止まって何故うまくいかないのか問題点を見定めることが大切だと思う。それから先に進んでも決して遅くはないのだから。壁は成功への通過点。ステップアップのチャンスなのだから。

父の友人が一步ずつ前進をしている中、また新たに土砂災害のニュースが報道されているのを目にする。

父と友人も同じように頑張ってきたであろう、家の中から大量の土砂をかき出す姿が画面に映し出されている。切ない思いが込み上げてくる。

誰かを大事に思える気持ちで、私たちは生きているのである。